

リレー連載 理事が語る

IT 非専門職の公務員が研究を始めたきっかけ

神奈川県庁 岩崎 和隆

このたび、常務理事総務委員長を拝命いたしました岩崎和隆と申します。この職務を精一杯努めたいと考えております。皆様、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

総務委員会の所管業務は、企画、会計管理、組織管理、総会・理事会・評議会の運営、日程計画・管理、渉外（協賛依頼および受託、紛争）、入退会手続・会員管理業務の情報化となっております。

会員の皆様におかれましては、これら総務委員会の所管業務について何かございましたらご相談くださると幸いです。また、総務という名称の委員会は、どこの委員会の所管業務にも属さない事項やどこの委員会が所管か分からない事項についても一旦お受けするものと理解しております。（会長、副会長や各委員長の異論がなければ、このようにしたいと考えております。余談ですが、当学会の全国大会・研究発表大会をたびたび協賛している地方独立行政法人神奈川県立病院機構で総務を担当していたときは、そのようにしておりました。）

なお、私の連絡先をご存じない方は、事務局のメールアドレス宛にご連絡ください。（事務局は常勤でないこと、私自身もフルタイムの仕事が別にあることから、回答に時間がかかる場合がございます。）

ところで、最近、何人かの方から、研究のきっかけや研究の動機を聞かれました。確かに、IT 非専門職の公務員が官公庁情報システムの研究をしていることに違和感を感じる方が少なくないようです。行政学では、脱サラならぬ脱公務員をして研究者になっている方が一定数いらっしゃるのですが、そのような方から見ても、現職公務員のままで研究発表を継続していることには違和感があるようです。

そこで本稿では、当学会との出会いと私が研究を始めたきっかけを説明して、ご挨拶に代えたいと考えております。

当学会には、学会発足当初から入会しております。日経コンピュータで当学会が発足するという記事を拝読し、人間中心の情報システムという理念にとっても共感しました。すぐに連絡先をインターネットで調べて入会を申し込みました。竹並先生が丁寧に対応してくださったと記憶しています。

学会設立総会で故今道友信先生の講演会^{*1}を拝聴し圧倒されたことを、昨日のこのように覚えております。

研究を始めたのは2012年です。そのきっかけについては、一部思い出せない点もありますが、覚えている限りのことを説明します。

神奈川県（以下「県」と言います。）では、私が採用された当時、IT専門職の採用は行っておりませんでした。ゆえに、私自身、非専門職です。大学のゼミは行政法で、県の実務でも土木許認可業務という、行政法務を担当したことがございます。ちなみに、行政法務は企業法務と全く異なるものとお考え下さい。

2010年より、地方独立行政法人神奈川県立病院機構の人事給与システムの開発において調達手続きから開発完了までを担当しました。その際、民間企業出身の非常勤顧問の助言を受けながら、発注者側のプロジェクトマネージャを担当しました。当時、毎日のようにその非常勤顧問と昼食をご一緒しました。その非常勤顧問がしばしば「官公庁情報システム調達では適切な受注者を選定できるとは限らない。適切な受注者を選定できるか否かは運次第だ」とおっしゃっていました。私は、行政法というバックグラウンドがあるので、それに異論を唱えたかったのですが、そのような状況にあることは認めざるを得ませんでした。しかしながら、官公庁情報システム調達といえども行政法の一分野であるわけですから、運次第という状況はおかしいという気持ちは、いつまで経っても消えません。

そういう気持ちを持ち続けたまま、調達、そして開発を行いました。カットオーバーの状況がやや芳しくありませんでした。カットオーバー後に調達を省みると適切な受注者を選定できたとは言い難いとの考えに至りました。そして、単に私の仕事ぶりがへボかったということでは済まされない、官公庁の情報システムにとって深刻な課題があるのではないかという直感がありました。（それから11年が経過し、今では官公庁の情報システムにとって調達は大きな課題であると確信しています。）

また、システムがカットオーバーして、少し時間ができました。そして、Googleで文献を調べていたら、官公庁情報システム調達が学術研究の対象であることが分かりました。そこで、私自身の考えをまとめて学会発表することにより、有識者の皆様から何等か実務上有益なフィードバックを得られることを期待して、2012年に初めての学会発表をしました^{*2}。学会発表エントリにあたり、大会プログラム委員長の石井先生に大変親切にしてくださいましたことをよく覚えております。

発表後の質疑応答でフィードバックは、ある程度は得られました。その一方で、フィードバックは限定的であり、私自身が主体的に考える必要があるとも感じました。要するに、他力本願は一定程度正しく、一定程度間違っているという認識に至りました。

その後、研究発表を中断した時期もありますが、いくつかの研究発表を重ね、今に至っ

ています。当学会での研究発表はつづけつつ、2年前から文系学会でも研究発表を行っています。

また、最初の発表後、川野副会長（現）からはメルマガへの寄稿を、魚田先生からはメルマガでも論文誌でもよいので寄稿を、石井先生からは論文誌への寄稿を求められたのですが、当時は自信がなくて、すべてお断りしてしまいました。

2019年7月下旬に、故芳賀正憲様と2人だけで情報システム学執筆に係る担当章の打ち合わせをしました。用件が終わったところで、芳賀様から官公庁の情報システムに係る連載記事をメルマガに寄稿するよう強く迫られました。断り切れずに8月でなく9月からにしてくださいと申し上げるのが精一杯でした。連載を開始した翌年にCOVID-19が我が国に上陸し、そして官公庁DXブームが発生しました。私のメルマガ連載記事や研究は、そのブームに乗ったような形になり、今に至っています。ただただ、芳賀様を始めとした当学会の皆様と運のおかげです。

思い返すと子どものころ、とても病弱で頻繁に入院していました。そのとき、ナースの皆様、医師の皆様、病院の隣の養護学校の先生方に親切にさせていただいて以来、当学会でもいつも、様々な方に親切にいただき、とても恵まれていると感じております。

このたび、総務委員長を拝命しましたので、会員の皆様のために裏方として尽力したいと考えております。

今後とも、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

※1) 今道友信, “情報と倫理—21世紀の課題—”,

<https://www.issj.net/soukai/2005/lecture2.html> 参照 2023-6-12, 情報システム学会設立総会講演, 2005.

※2) 岩崎和隆, “地方の公的機関の情報システム調達実務における供給者評価方法について”, https://www.jstage.jst.go.jp/article/proceedingsissj/8/0/8_d2-1/_pdf/-char/ja 参照 2023-6-12, 情報システム学会全国大会論文集, 2012年8巻 D2-13, 2012.